



釣り人による自然保護 「ミゾゴイを守る活動」についてお知らせします。

文・安部滋

釣り人だからできること

初めまして。環境アセスメントを生業に、釣りはキモチイイを目指して楽しんでるレイウンのアベと申します。早速ですが、ご存じでしょうか？ 釣り人は、外で遊ぶ他の趣味の人たちから疎ましがられています。屋外で楽しむ趣味の中でもっとも人口が多いのが釣りです。善し悪しを別として多数派が主流になるこの国で、釣り人の肩身はどんな狭くなつていくよつに感じます。なぜ嫌われるのでしょうか？ そもそも気に入られる必要はあるのでしょうか？ ひっそりと個人で、または仲間内で楽しむから別に問題ないと考える人もいます。しよつ。しかし現実はどうでしょう。釣り禁止、立ち入り禁止、看板が立ち、柵が張られ、釣ることのできる場所はどんどんなくなっています。釣りを好意的に、少なくとも偏った見方をされないように働きかけるほうが得策ではないでしょうか。

では、何をするか。私からの提案は「鳥」です。ススキと同じようにカモメはイワシを食べ、プラグバスと同じようにサギはオイカワを狙います。この紙面に出てくる人の多くも鳥をヒントに魚を探していますが、皆さんも釣りをする時に鳥を見かけることはないでしょうか？ その中には絶滅の危機に瀕している鳥が含まれている可能性があります。釣りのついでに鳥を見て、その情報をお寄せ下さい。私と仲間たちでその情報をまとめ、釣り人による調査結果を発表します。バードウォッチャーが行かない場所に釣り人はいるのです。この川でこの鳥を見た。あの干潟であの鳥がいた。または、その沢では見なかった。1200万人とも言われる日本中の釣り人の情報から得られる調査結果はどんなものになる可能性があります。これらの情報は研究者ですら持ち得ないのです。

まずは、「ミゾゴイ」から調査してみたいと思います。

聞き慣れない名前前の鳥だと思えます。かつては北海道を除く日本中にいたカラスより少し小さな鳥です。絶滅の危険性のレベルは、ヤンバルクイナのつ下、イヌワシやカタカと同じランクです。ミゾゴイは春フィリピンや中国南部から繁殖のため渡ってきます。繁殖する場所は里山の沢沿いです。そうです、解禁になり、いそいそとヤマメを釣りに出かけるあの場所に行つてくるのです。ところがそういう場所にバードウォッチャーは、そうそうやつて来ません。しかし、そういう場所には釣り人がいます。釣り人は魚がいそうならどこへ入っても行きます。しかも出発は午前2時半。他の趣味の人から見れば間違ひなくオカシイ人。しかし、方々で釣り人は、そのような調査ができる貴重な存在です。釣り人は、鳥を含めた大きな自然環境と、気持ち良い釣りを守ることができると可能性を秘めているのです。ただ、釣りに行つた時に観察するだけで、十分にその役割を果たせるのです。

やり方についてはお問い合わせをいただければ追つてお知らせしたいと思います。また、ご意見等いただけるとう嬉しうかぎりです。(問い合わせ先は rararaven@ybb.ne.jp)

【ミゾゴイに関するメモ】

大きさはカラスより少し小さい。4月上旬に南方より渡来する茶褐色の羽を持つサギ科の鳥。世界絶滅危惧種で推定個体数は100羽以下とされる。日本でのみ繁殖が知られていて、トキやコウノトリのような派手さはないが日本を代表する鳥のひとつといえる。1970年代まで北海道を除く日本の各地で繁殖していた記録があるが、ここ30年間で絶滅の危機に。原因は日本の農耕文化の衰退。採餌に好適な人の手に入った草地、田んぼ、湿地などが開発のため減少したことで、生活環境が失われたものと考えられる。ミゾゴイの鳴き声を聞けるホームページはこちらです。http://midopika.cool.ne.jp (以下雑誌「自然保護」より抜粋)